

じゃくんじゃくん、とはさみの音が間断なく続いている。

「ヒダリ、疲れんか？」

「疲れない」

「ヒダリ、眠くならんか？」

「ならない」

「ヒダリ、飽きんか？」

「ミギ、無駄口叩いてないでいい加減仕事しろ」

顔も上げずヒダリが言った。じゃくん、とはさみが糸を切る。ミギは頬を膨らませ、口を尖らした。話し相手にもならんやつよのう、と胸中でつぶやき、拝殿の賽銭箱の前に移動する。向こう側から参拝客が鈴をがらがらと鳴らして賽銭を放ってきた。ミギは社の中からじいとその人間の顔を見つめた。三十手前ぐらいの男で、フレームのない眼鏡をかけている。まじめそうな顔つきだ。

ミギはその人間を興味深く見つめていたが、男はそれに気づくことなく、むしろ見えていないとでも言うように柏手を打ち、目をつむった。しばらくの間そうしていると、また目を開けて拝礼し去っていった。男は、最後

まで目の前のミギにも、奥のヒダリにも気づく様子はない。それもそのはずで、ミギ、そうしてヒダリは人間ではなかった。彼らは神というものであった。

見た目は十にも満たない子どもの姿で、白い着物を身につけ腰からは身体に不釣り合いな大きなはさみを吊るしている。ミギは白く長い髪を膝の裏まで下ろして、ヒダリは短い黒髪だった。

ミギはほう、とため息をつく、と、跳ねるような足取りでヒダリの元に向かった。

「ヒダリ、今のひとはキャバクラで働いている元教え子と結婚するために女房との縁を切りに来たらしいぞ。ドラマチックというやつだなあ」

目を輝かせるミギに対して、ヒダリは短くそう、とだけ答えた。じゃくん、とひとつはさみを動かすと、刃を閉じて布で拭き始めた。無感動な反応にミギはむうっと口をへの字にする。

子どもらは縁切り神社の神であった。腰に下げたはさみで縁の糸を切るのが役目である。そのために子どもらには縁の糸が見え、それに連なる事象もまた見えるのであった。

ミギは踵を返すと、賽銭箱を飛び越えて拝殿の前の石段に腰かけた。足をぶらぶらさせながら、なぜ縁切りの神社に配属されたのであろう、と何度目になるかわからぬ問いの答えを考え始める。ヒダリは黙々とはさみを磨

き続けているらしい、ときたま、きゅつきゅと音が聞こえた。

ミギの生国は出雲であった。母は縁結びの神で、ミギは自分もそのまま縁結びの神になるのだろうと漠然と思っていた。人間のする恋というものは興味深かったし、学校でも暇を見つければ万葉や古今や歌ばかり読んでいた。

だのに今のミギは縁切りの神で、同僚は無愛想だ。現状に満足しているとは言いがたい。

不意に、ひらと空から白いものが降りてきた。

「おお雪か」

——よのなかに絶えて六花のなかりせば吾が身は恋にやからまし

歌を思い出し、ミギはふふと笑った。ぺたぺたと裸足で石段を上り、いまだにはさみを磨いていたヒダリに声をかけた。

「ヒダリ、名残雪だぞ」

その言葉によくヒダリは顔を上げて空を見、そうだねとつぶやいた。

やはり反応の薄いヒダリにがっかりしながら、ふとミギはひとつの謎かけを思い出した。

無粋なヒダリにわかるだろうか。意地悪く思いながら、にやりと笑う。

「なあヒダリ、謎かけだ。雪が溶けると」

「春になる」

布を袂にしまいこんで立ち上がりながら、ヒダリはきよろきよろと辺りを見回した。

「ミギ、掃除するからバケツと雑巾、……どうしたの」

ぼかんと口を開けていると、ヒダリが不審そうな声を出した。ミギは首を振ってなんでもないと言いながら、頬がゆるゆると笑んでいくのに気づいていた。

「ヒダリ、今度歌集を貸してやろう。おもしろいぞ」

「そう。ありがとう」

その反応はやはり素っ気ないように感じられたがしかし。

なんだ、仲よくやれそうじゃないか。

ミギは思い切りヒダリに抱きついてやった。

キーワード

「はさみ」、「雪が溶けると」